

中学校の実践報告

1. いじめ事案に対する組織の実態・課題による目標設定

いじめ事案に対する 組織の実態	目標 (目指す組織像)	いじめ事案に対する 日常的な課題
・いじめ事案に対して、学年の教職員で連携した対応をとることができる。 ・学年をまたいで対応するいじめ事案については、生徒指導主事が管理職への連絡を含め指揮を執り、指導や支援を行っている。 ・担任や部活動の顧問だけが抱えることもあり、密な報告、連絡、相談が十分にできていないことがある。	・教職員がいじめに対する共通認識をもち、いじめの兆候を捉える力を身に付ける。 ・教職員がいじめへの早期対処の流れを再確認し、対応力の向上を図る。 ・再発防止のための中・長期的な支援の充実を図る。	・いじめの兆候が見えにくく、未然防止が難しいため、その兆候を把握する術が生徒や保護者からの申し出に頼るところが大きい。 ・いじめ事案に対して、早期対処はできているが、再発防止のための中・長期的な支援が不十分な部分もある。 ・生徒への事後の指導や支援はできていると思われるが、保護者との密な連携には課題がある。

2. 研修のねらい（実践前）

【ねらい（研修を通じて伝えたいこと・組織に期待すること）】※箇条書き	時間の目安
・いじめ事案に立ち向かう教職員集団を構築する。 ・いじめの深刻化リスクに基づいて、いじめを捉える力を育成する。 ・早期対応だけでなく、中・長期的な対応についての認識を高め、集団の共通理解を促す。 ・互いの意見の相違に気づき、互いを尊重する活動を通して同僚性を醸成する。	90 分

3. 研修の実践

実施日	機会（職員会議・担任会など）	活用事例
11 月 19 日 木曜日	いじめ・不登校対策委員会（現職研修）	事例 3（中①）
実施時間	参加者	
15：00～16：30（90 分）	校長・教頭・教務主任・校務主任・3 年教員・2 年教員・1 年教員 特別支援学級教員・養護教諭・学校生活サポーター 計 40 名	

4. 工夫したこと（独自性）

・いじめの対応方針のグループ共有を充実させ（標準 18 分→28 分）、研修時間を大幅に変更した（標準 60 分→90 分）。 ・柔軟な対応方針を多く出してもらうため、資料 2 の裏面【支援の方向性の例】は後日配付することにした。 ・参加者一人一人の意見を大切にするため、事例ワークでは全体への介入をなるべく減らし、司会担当の教員がもつ意見をつなげる力（ファシリテート力）に委ね、各グループの主体的な話し合いを促すこととした。 ・事例ワークでの話し合いを研修後の教育活動に生かせるように、学年ごとにグループを編成した。
--

5. 実践して気が付いたこと（成功点と改善点）

【成功点】

- ・ いじめの対応方針をグループで共有する時間を充実させたことにより、具体的な対応策や役割分担まで検討することができた。
- ・ 対応策を検討する中で、本事例と同じような過去の事案に対する対応を振り返りながら、話し合う学年もあった。
- ・ 司会者を担当した教員は、十分打ち合わせた上で各グループのファシリテートを行ったことにより、幅広い教員の意見を引き出すことができていた。そのため、ワークに参加したどの教職員も自分事として捉え、主体的に取り組むことができた。

【改善点】

- ・ 可能であれば、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家も研修に参加できると、教職員とは違った視点の意見が出て、新しい学びの機会になると思われる。
- ・ 学年ごとにグループを組んだが、グループ間で意見の交流や共有を図れると、共通理解が深まるといった。

6. 参加者の声（『個人の振り返りシート』より）

- ・ まとめに示された文字だけの情報では判断できない部分が多く、改めて生徒の様子や顔を見ながら話すことの大切さを学んだ。
- ・ 被害に遭っている子どもに寄り添うのはもちろんだが、加害者とされている子どもの背景や心に抱えたものにまで想像力をはたかせたい。
- ・ 「客観性」をどう捉えればよいか難しいと感じた。普段の生徒指導においても、「客観性」について意識する必要があると思った。
- ・ “どこからの対応策なのか”，“画期的なものじゃないといけないのか”など、考えすぎてしまった。周りの先生方が意見をたくさん出してくれたので、自分にはない視点を知ることができた。
- ・ 一つのケースに対して、担任一人が対応するのは不安だが、学年でチームとして対応すると安心であるし、子どもにとって最善の方法が見つかると感じた。
- ・ 物事の捉え方、判断の仕方は十人十色だと思うが、情報共有やフローチャートに則して合意形成ができることで客観的な認識で事象を捉えることができた。
- ・ 支援や指導の方向性を出すためには、最終判断を下す人が決まっている方がよいと思った。
- ・ 1回の指導で解決したと思いつまらずに、長期的に観察し、小さな芽を発見し、子どもたちの声が届きやすい環境をつくっていききたい。
- ・ 最終的に生徒全員が安心して学校生活を送れるよう、チームで協力して中・長期のケアや指導を大切にしていきたい。

7. 考察（感想，成果，今後の課題や組織への期待）

研修日が近づくにつれて、「自分一人でやっているのではないか」「実りのある研修にすることができるのか」という不安な気持ちが正直あった。しかし、司会者・記録者の先生方と打ち合わせを重ねる中で、意欲的な意見をもらい、次第によりよい研修になることが期待できるようになった。私も研修を一人でやっているのではなく、みんなでやっているという感覚をもつことができ、うれしく感じた。

研修中は学年ごとに主体的に取り組む先生方の姿が多く見られ、温かい人間関係を基盤とした同僚性が確実に構築されていることを実感した。一過性の研修とするのではなく、この研修をきっかけにして、本校の同僚性を基に、「深刻化のリスク」を活用し、チームで実際のいじめ事案に立ち向かう教職員集団の構築を継続させていきたい。